



漆塗り道具

URUSHINURIDOUGU

担当 真柄侑

職人の心意気、
語ります



● 寸 法：(左奥桶) 径27.0cm × 高さ20.6cm

● 材 質：木・竹(タガ)

弘前市なのに“越前屋”?

漆塗りに使われていた桶の側面に、店の名前の判があります。

「弘前市和徳町 株式会社越前屋漆商店」

…はて、なぜ弘前市の店に“越前”という名前が?

こんなことを疑問に思い、弘前市の漆工芸、津軽塗の歴史について調べてみました。

津軽塗の歴史をたどる

青森県では、縄文時代から漆の利用がみられましたが、漆器生産地としての基礎は江戸時代初期に築かれます。津軽地方の漆工芸は、刀剣や甲冑の漆工技術にそのルーツがあり、各地から技術が集まっていました。

そんななか、1685(貞享2)年に池田源兵衛という塗師が津軽へ招かれました。彼の出身は若狭小浜藩、現在の福井県です。そしてこの人物こそ、のちに津軽塗の大きな特徴となる変り塗技法(色漆を塗り重ね、研ぎ出して平滑に仕上げる)へ移行する端緒を作った人だったのです。その後、息子源太郎が父の遺志を継ぎ、江戸で8年間の修業を経て変り塗を身につけ、他の塗師たちを圧倒しました。

1883(明治16)年には、和徳町にて源太郎(襲名後：青海源兵衛)の裔を工長とした漆器製造所が発足しています。この「越前屋漆商店」も何らかの関係があったのかもしれませんが。

“津軽の馬鹿塗”一塗りの堅牢さは日本一!

資料には店名のほかに、例えば一番大きな桶には「上生漆」、小さい容器には「上朱漆」といった判もあり、おそらく各工程によって容器を使い分けられていた様子がみられます。

下地付け、模様付け、塗り重ね…など基本的手順がありますが、津軽塗が誇る独自の「研ぎ出し変り塗」技法は約50工程にも及ぶほか、“馬鹿塗”と呼ばれるほど、塗りの堅牢さでは右に出るものがないといわれています。「馬鹿正直なほど手抜きをしない」津軽塗にとっての誉め言葉です。

作業が垣間見える資料のこんな文字からも、津軽漆工芸の実直さに思いを馳せられたのでした…。

引用・参考

- ・岩本由輝 2002 『東北地域産業史—伝統文化を背景に—』 刀水書房
- ・沢口悟一 1966 『日本漆工の研究』 株式会社美術出版社
- ・「新編 弘前市史」編集委員会編 2003 『新編 弘前市史 通史編3(近世2)』 弘前市企画部企画課
- ・21_21 DESIGN SIGHT 2012 『colocal books 東北のデマヒマ【衣・食・住】』 株式会社マガジンハウス